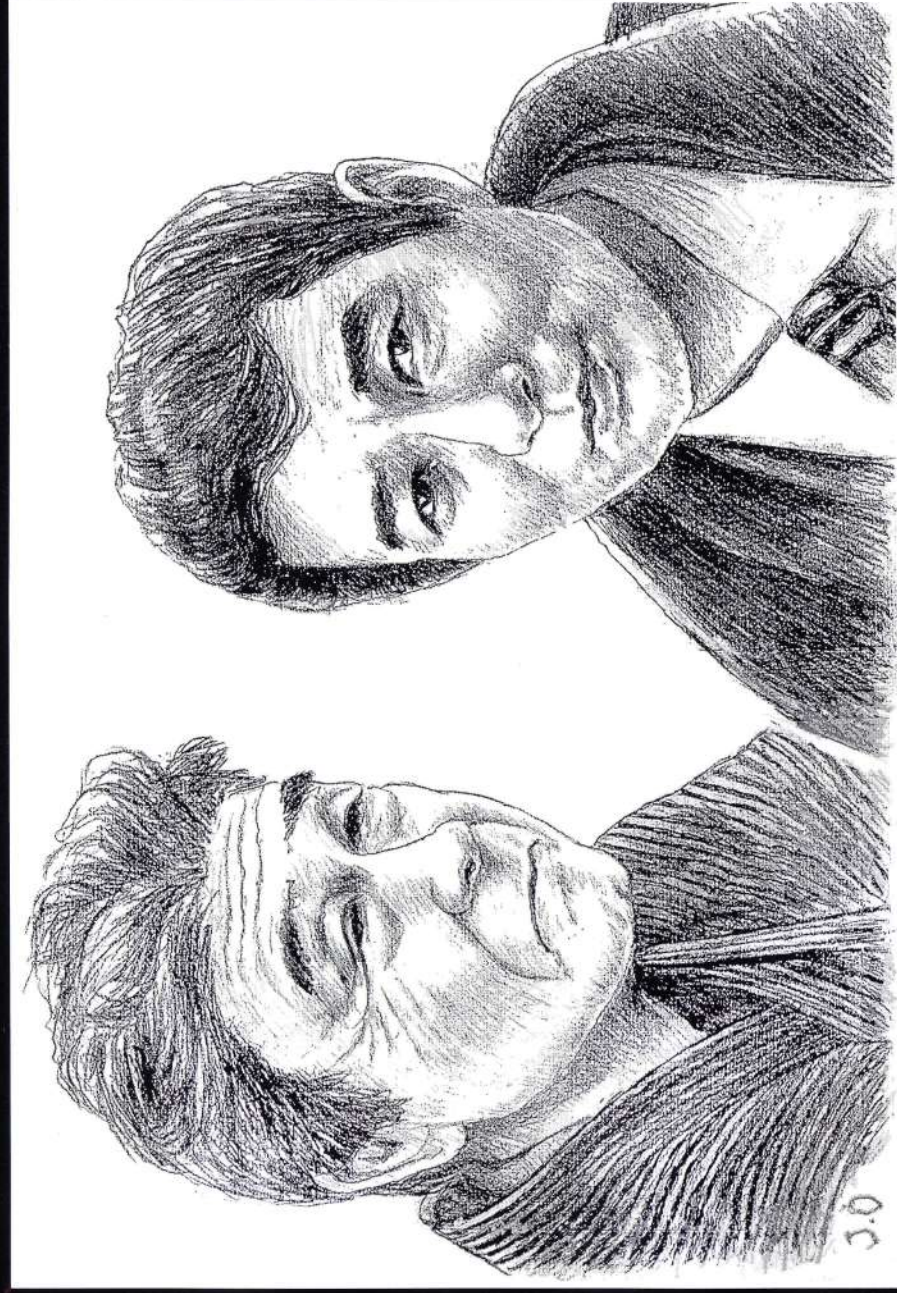




# 小田原男声合唱团

## 第45回定期演奏会

— 第63回 小田原市民文化祭参加 —



2016.12.3 (土) 午後1:15 開場 午後2:00 開演  
小田原市民会館大ホール

主催 小田原男声合唱团  
後援 小田原市教育委員会  
日本男声合唱協会 (JAMCA)  
神奈川県男声合唱協会 (KAMCA)  
湘南合唱連盟  
小田原地区合唱連盟  
小田原音楽連盟



〔第44回 定期演奏会 ワンステナーズメンバーと共に〕「月光とピエロ」から

## ごあいさつ



小田原男声合唱団  
団長 斎藤 恵司

本日はお忙しい中を第45回定期演奏会にお越しいただき、本当にありがとうございます。

今回の定期演奏会は、小田原にとっては45年という節目であると共に、新しい指導スタッフでのスタートの年でもあります。昨年の定期演奏会のステージにおいて、常任指揮者の交代が行われ、これまで長い間にわたり小田原男を指導していただき、音楽監督・常任指揮者を務めてこられた外山浩爾先生から、辻秀幸先生に常任指揮者をバトンタッチされました。外山先生には名誉指揮者として、小田原に関わっていただいております。

辻先生には、第43・44回の定期演奏会に客演指揮者としてお迎えし、先生の素晴らしい音楽性、指導力に団員が引き込まれていました。小田原男声合唱団の常任指揮者として就任していただいたことは大きな喜びです。そして、若手の村田雅之先生を指揮者に迎えることができました。『私より若い方は、小田原にはいませんから』と村田先生が日ごろ口にされているように、一番の若手の存在です。このように、合唱界の重鎮、新進気鋭という二枚看板の指揮者を迎えるの記念すべき1回目の演奏会となりました。

今回は、二つの信長貴富作品をそれぞれの先生にお振りいただきましたが、二曲ともに2015年に出版された新しい作品（「思い出すために」は男声四部版として）です。小田原委嘱作品の多い信長先生の曲での新たなスタートには何かのご縁を感じます。そして、ワンステナーズの皆さんと共に演奏する「富士山」は、多田武彦作曲の男声合唱曲としては人気の高い作品です。富士山が世界遺産に認定され、数年前が経ちましたが、小田原、神奈川には身近な富士山です。草野心平の詩と共に楽しんでください。お陰様で今年もワンステナーズメンバーの皆さんが20名近く集まり、60余名の迫力ある男声合唱をお届けできることは大きな喜びです。また、昨年、好評をいただいた『会場のみなさんと一緒に』を今年も企画しました。是非、皆さんもお楽しみください。

さて、今回の演奏会が45年の節目の年と述べさせていただきましたが、次の節目はやはり50年ということになると思います。1971年創立の小田原は2021年に50周年を迎えます。団員の高齢化、団員数の減少と課題を多く抱える現状ではありますが、男声合唱をこよなく愛する男のロマンを常に持ち続け、50周年を無事に迎えたいと思います。団員がよく口にする言葉で『二度目の東京オリンピックを見よう！、小田原50周年のステージに立とう！』というものがあります。ささやかでもあり、そして、とても大きな目標でもあります。いつまでも歌える喜びを大切に団員一同精進していきたいと思っております。

今後皆様のご理解ご協力を宜しくお願いたします。

最後になりましたが、今年もこのように定期演奏会を開催できますことは、私たちを支え、応援していただいている多くの方々のお陰と感謝しております。心からお礼申し上げます。  
それでは、本日の演奏を存分にお楽しみいただければ幸いです。

# プログラム

## I 寺山修司の詩による6つのうた

「思い出すために」(男声四部版) 寺山修司 作詩 信長貴富 作曲

指揮 辻 秀幸  
ピアノ 中根 希子

- 1 かなしみ
- 2 てがみ
- 3 世界でいちばん遠い土地へ
- 4 ぼくが死んでも
- 5 思い出すために
- 6 種子 (たね)

## II 男声合唱とピアノのための「時代」より 信長貴富 編曲

～ ニューミュージックと呼ばれた歌たち ～

- 1 無縁坂 / グレープ 作詞作曲 さだまさし
- 2 瞳を閉じて / 荒井由実 作詞作曲 荒井由実
- 3 サボテンの花 / チューリップ 作詞作曲 財津和夫
- 4 生まれて来る子供たちのために / オフコース 作詞作曲 小田和正
- 5 時代 / 中島みゆき 作詞作曲 中島みゆき

指揮 村田 雅之  
ピアノ 中根 希子

—— 休 憩 ——

## III ロシア民謡

- 1 カリンカ 楽団カチューシャ 訳詩 橋本 剛 編曲
- 2 ともしび 楽団カチューシャ 訳詞 橋本 剛 編曲
- 3 赤いサラファン 津川圭一 訳詞 藤沢幸子 編曲  
全員合唱 ～ 会場の皆さんとご一緒に ～  
指導 杉山範雄 ピアノ 村田雅之

指揮 村田 雅之

## IV 男声合唱組曲「富士山」 草野心平 作詩 多田武彦 作曲

～ ワンステージ メンバー と共に ～

- 1 作品第壹 (一)
- 2 作品第肆 (四)
- 3 作品第拾陸 (十六)
- 4 作品第拾捌 (十八)
- 5 作品第貳拾壹 (二十一)

指揮 辻 秀幸

## 歌人 劇作家 寺山修司 (1935 - 1983)

青森県弘前市生まれ、八戸市、三沢市等へ転居。青森高等学校へ進学。早稲田大学入学に伴い上京、以来東京で暮らす。肝硬変腹膜炎で47歳で逝去。少年時代から、詩、俳句、短歌で際立った才能を開花させ、やがて俳人、詩人、演出家、映画監督、小説家、作詞家、脚本家、随筆家、評論家、俳優、写真家など様々な分野で目覚ましい活動を展開し、膨大な量の文芸作品を発表する。他方、競馬への造詣も深く馬主になるほど。メディアの寵児的存在で新聞や雑誌等の紙面を賑わす様々な活動を行う。あまりの多彩さゆえ、「職業は寺山修司です。」と語っていたのは有名な話である。31歳の時、演劇実験室「天井桟敷」を設立。その前衛的な演劇はヨーロッパからも高く評価され、何度も海外公演を行っている。寺山修司が為した膨大な仕事群とは裏腹に、その人生・生き様・心の内は、平坦なものではなく、前衛的な演劇や映画よりも、むしろ率直な詩作に濃く滲んでいるように感じられる。

## 寺山修司の詩による6つのうた「思い出すために」

信長氏は『男声の歌唱によっても、寺山作品の諸要素一寓話性の中に込められた真意、ニヒルな語り口に包まれた感傷、個(孤)と他者との距離感一は音楽に滲みこんでおり、むしろそれが生々しく浮かび上がってくるようにも思います。』と述べている。「思い出すために」の詩に共通するもの、それは真直ぐな感情であり、青い輝き、喜び、悲しみ、希望、絶望、時には暗喩を用い、時にハッとさせられるほどの素直な言葉で「寺山修司」という人間をそのまま隠すことなく訴えている。 **かなしみの鋭利な感情の訴え、てがみの** ※

## 男声合唱とピアノのための「時代」

福岡県の西南シャントウール(西南学院グリークラブOB)の委嘱で、2007年に初演された。“団塊の世代”が当時楽しんだ「ニューミュージック」を集めてワンステージを、との提案であった。

それは『日本で、1970年代に流行した、シンガー・ソングライターによる新しいポピュラー音楽の総称』とされている。フォークとも歌謡曲とも異なる音楽というニュアンスではあるが、定義は曖昧である。その頃、歌謡曲と言えば、作曲家・作詞家が分業で作るのが通例であったが、フォークグループの人達(作詞作曲を自分でする)の中から、やがてポップス寄りの人が次々に出て来るようになった。そこでニューミュージックの方向がアイドルや歌謡曲歌手に曲を提供するようになり始め、80年代末には、歌謡曲の世界にもニューミュージックの曲が主流となつてく。Jリーダが誕生し、J-POPも誕生した時代でもある。

合唱団お江戸コラリアーザの再演(2014年)に当たり2015年出版。そして、2016年10月、本家、西南シャントウール東京公演により再演された。

**無縁坂** 1975年、グループの6枚目のシングル。東京都台東区池之端1丁目から文京区湯島4丁目へ登る坂の横ある無縁寺が名前の由来と伝えられている。無縁坂を舞台に、息子の年老いた母に対する熱い想いを歌ったもの。日本テレビのドラマ『ひまわりの詩』主題歌にも使用された。**瞳を閉じて** 1974年シングル『12月の雨』B面。長崎県立五島高等学校奈留分校に在学していた女子高生がユニーミンのラジオ深夜番組に「私達の分校にあ

## 作曲家 信長貴富 氏 (1971 -)

1994・95・99年 朝日作曲賞(合唱曲最高賞を三度受賞)  
1998年 奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第1位  
2000年 現音作曲新人賞入選(室内楽曲)

2001年 日本音楽コンクール作曲部門(室内楽曲)2位  
兵庫県西宮市生まれ、東京都出身。合唱が盛んな自身の小学校の影響を受けて作曲を始める。1994年、上智大学文学部教育学科を卒業後、一旦は公務員に就くが1997年作曲家として転身。作曲は独学で、ピアノ他音楽の専門教育を受けた経験もない。合唱活動を長く続けてきたこともあり、大部分は合唱曲であるが、歌曲や器楽曲にも精力的に取り組んでいる。女声、混声、男声等、広く意欲的に次々と作曲編曲を重ね、作品は膨大である。今日、合唱祭では必ずと言っていいほど、信長貴富作品が歌われている。

親しみやすい小品から、無調的な作品まで、作風は幅広く、ポップス作品の合唱編曲も積極的に手がけており、巧みなアレンジが伺える。

小田男が過去に演奏した信長貴富 委嘱編曲作品

- ・男声合唱のための **宮崎駿 アニメ映画音楽集**  
さんぽ いつも何度でもさんぽ～finale～
- ・5つのオアハケーニヤによる**憧憬**
- ・男声合唱とピアノのための「赤い鳥小鳥」  
～ 北原白秋童謡詩集 ～
- ・男声合唱とピアノのための「わが詩友」

※ 妖しげな儚さ、**世界のいちばん遠い土地へ**の壮大な思い、**ぼくが死んでも満ち足りた悲しみ**、**思い出すために**の蒼さと輝き、**種子(たね)**の未来への希望感傷。信長氏のこの素晴らしい曲を通して、そこに溢れ出る寺山修司の純真さを伝えることができると思えます。

った校歌を作つて欲しい」と投書。当初、加藤和彦が曲を作り、番組でもオケエア。後、依頼者のもとに届けられてる筈であった録音テープが行方不明となり、改めて奈留島の海や山のイメージを詩に託し荒井由実作詞作曲による「瞳を閉じて」が贈られた。1976年分校より奈留高等学校へ独立、この曲は校歌として検討されたが、愛唱歌(幻の校歌)として制定。卒業式は勿論、島を離れる船の出港の際にも流される島全体の愛唱歌となった。**サボテンの花** 1975年、8枚目のシングル。当時西南学院大学在学中の財津和夫が中心となりチューリップを結成。財津自身の失恋体験が元となつている。女性が彼の家で靴下などを洗濯して言ったことなど、その時の光景を思い出して作つたと言われているが、歌詞全てが実話ではないと言ふ。「恋人に去られてしまつても、春が来たら自分も再生し、再び歩き出す」との意味付けで広い空をイメージしたものと述べられている。**生まれ**  
**て来る子供たちのために** 1979年18枚目のシングル。「オアハコースのテーマ、自分自身のテーマとして、盛り上がりつつある時に、次の活動に繋げていきたい、普通の時に出していたら、良い曲だけれど地味だつて言われるだけだから…」と述べている。**時代** 1975年。「マッサン」の主題歌『妻の唄』も好調だが、歌手生活40年、シングル44作アルバム40作を数えている。他アーティストへの歌詞楽曲の提供も行っている。父・眞一郎氏が**1975.9.14**に倒れ昏睡状態の中、9日後にデビュー。10月のポプコン・世界歌謡祭まで意識が戻らず、病室から会場へ。そこで披露されたのが**時代**。この曲を作った当時は23歳、その若さで表現しきつた才能は際立ち多くの感銘を与えた。

ロシア民謡 会場の皆さんとご一緒に

「ロシア民謡」は、ロシアの民族・伝承に基づいた叙情歌とされるが、広義には近代以降の俗謡や歌曲なども含まれている。一部にはロシアの歌は物悲しいとのイメージが持たれているが、日本人の好みに合わせ、短調の歌が多く持ち込まれたというのがある。日本との政治関係は元々あまり良好とは言えなかったが、その日本好みロシア民謡は日常的にやがてポピュラーなものとなり、明治中頃から戦後まで日本語の訳詞あるいは作詩が進み、「カリンカ」「ヴォルガノ舟唄」「黒い瞳」「アムール河のさざ波」「ともじび」「一週間」など、その数は数十曲にのぼる。

1. カリンカ

結婚式の際の群舞として歌われる「カリンカ」は母のような植物で花嫁を意味し、「カリンカ」はカリーナ(灌木)の愛称形、古いロシアの婚礼では、この枝を折ることが正式な婚礼の儀式であったと伝えられている。長い間、ロシア民謡と考えられてきたが、実際には作曲家・作家 民謡研究者のイワン・ペトロヴィチ・ラリオーフが1860年に作詞作曲した作品である。この歌の初演は、彼が音楽を書いたサラトフのアマチュア劇団の芝居で、舞台上で歌われたもの。やがて友人の歌手スラヴァンスキーの依頼により、その合唱団でのレパートリーの一つとなり人気を集めた。

2. ともじび

ソビエト連邦時代に流行したロシアの歌曲である。作詞はミハイル・イサコフスキー、作曲者は判っていない。戦地に赴く若者とその恋人の離別、

っている。

他方、ロシア民謡は、特にシベリア抑留から解放された帰国者によって日本に多く持ち込まれた。そのため流刑囚の歌や当時現地で流行していた戦時中の歌が多く、内容的にも物悲しい歌が多くなったことが特徴づけられる。

一方、戦後、ロシア民謡がポピュラーになるのは「灯(ひのり)」をはじめとする歌声喫茶も挙げられよう。テレビ普及前、そこは大勢の若者が集う娯楽の場でもあった。

また、ロシア歌曲を得意とするダークダックスが積極的にロシア民謡を取り上げたことも、日本中に浸透していく要因ともなっていた。

故郷と前線との距離を隔てた交情を主題としている。発表された第二次世界大戦の最中では、ここに描かれたような光景は当時のロシアのどこでも見られるものであり、この詩はロシアの大衆の心をとりこにすることを果たした。広く親しまれ口ずさまれるうちに、自然発生的にメロディーがつけられるようになっていった。こうしてでき淘汰され残ったのが現在知られている歌曲としての「ともじび」といわれている。

3. 赤いサラフアン

親が決めた結婚に乗り気でない娘とそれを諭す母の会話により成り立っている。原詩は10番まであり、1番から5番までは娘のせりふで、6番以降は母親である。サラフアンとはロシアの民族衣装のこと、ロシア語の「赤い」には「美しい」という意味もある。2007年テレビ東京のドラマ『李香蘭』で上戸彩がこの「赤いサラフアン」を歌うシーンが浮かぶ。

男声合唱組曲「富士山」

草野心平(1903-1988)第二次世界大戦を挟み1940年から1951年にかけて、富士山をテーマにした詩「作品第〇〇」のかたちナンバーによる題名で発表した全26篇。心平37歳から48歳にかけての詩業である。この間、家族を連れての南京移住(国民政府宣伝顧問)と敗戦による帰郷、苦悩の果ての文壇復帰と、心平は波乱の時代を生きた。

初期にはその時代背景ゆえに「富士山＝日本の象徴」的な描写もあるが、戦後は、「宇宙につながる永遠の存在」ともいえるべき普遍性をそなえた「大存在」へと〈富士山〉はせり上がっていった。

多田武彦の処女作は1954年の組曲「柳河風俗詩」だが、師の清水脩先生の「歌い手の声域を気にし過ぎている。男声合唱曲はもつとスケールの大きい、ダイナミックなものにしなければいけない」との薫陶を受け、1956年第2作目として組曲「富士山」が誕生した。心平の詩の偉大さと共に、雄大な「富士山」を表現するにふさわしく壮大な厚な作品となるが、当時の技術水準ではグループ泣かせの作品、初演後は演奏機会が限られた。

1. 作品第壹 (一)

富士山麓の古代幻視。花や鳥や蝶や馬や人までも一体となり富士の麓で春に酔っている。すると中国から、黄鳥が使者として渡ってくる祝祭。

2. 作品第肆 (四)

同じ春でも春愁がテーマ。東京郊外千住大橋付近の土堤が舞台。富士を背景に明るすぎる風景の中で、詩人は富士山までもが子どもらの縄跳びに参加しているような錯覚を覚えている。陽春からあままりにも遠い心の憂い(理由は不明だが)に、頬に当たった春光は涙のそれと紛うばかりである。

3. 作品第拾陸 (十六)

舞台は茨城県の牛久、その遙か西方に立つ日没時のシルエツト黒富士、その上空に金の雲、富士は一瞬神となりまた現実に戻る(ここまですべてが戦前の富士)。

4. 作品第拾捌 (十八)

「富士」という語は出てこない。「黄銅色の大存在。」とあるだけ。その大存在は地球の中心(地軸)と天を真つ直ぐにつないでいるという抽象度の高い想像。

5. 作品第貳拾壹 (二十一)

雨雲に閉ざされた平野の絶端に、明るく夕映えの富士に、目に見えぬ宇宙線大驟雨(しゅうりゅう)を想像する。

多田武彦(1930～)祖父や父は松竹の役員で、幼少の武彦を興行師にすべく歌舞伎・演劇・映画・浪曲などを鑑賞させた。中学生の時に敗戦をむかえ、どつと移入されたアメリカ文化に触れミニミュージカル映画の監督を志し和声学や作曲を独学。しかし、興行の不安定さを避け京大法学部に進み銀行員となる。傍ら清水脩に対位法を師事し、「日曜作曲家」として男声合唱を中心に膨大な合唱組曲を作曲。銀行勤務時代の「お客さまであつた作曲家山田耕筰先生から、君は『大正昭和の著名な詩人の叙情詩の中から春夏秋冬・花鳥風月・喜怒哀楽・起承転結が適当に組み込まれた詩』を厳選し、作曲・指揮・演奏に肝要な構成員性主要4項目(リズム・メロディ・和声学・楽式論)を駆使し、ただひたすらにア・カペラ男声合唱組曲の作曲に専念せよ』の教えに触れる。2006年委嘱初演の『互寒(ごか)小景』が65作目。85歳を迎える現在も意欲的に創作活動を続け、組曲だけでも130を数え、合唱に関わる者からは、「タダタケ」の愛称で親しまれている。平塚市在住。



**外山 浩爾 名誉指揮者**

外山国彦を父に、雄三を兄の音楽一家に生まれ、幼少より音楽教育を受ける。東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業後、同大学及び同附属音楽高等学校で教職に就く傍ら藤原歌劇団の活動に参画し、「森の歌」「ドイツクワイエム」等のソロ活動、「カルメン」「蝶々夫人」等、多数のオペラ活動、「歌のメリーゴーランド」等のテレビ長期番組のように広範囲で活動をする。他方、合唱活動では、世界合唱連合(現IFCM)設立代表委員、東京都合唱連盟理事長、全日本合唱連盟副理事長等を歴任する。殊に明治大学グリークラブをウィーン音楽祭で銀賞にまで育て、個人として明治大学特別功労賞(第1号)に輝く。国内外の現代合唱作品の数多くの新作初演等を行い合唱界発展のため尽力。

教育活動では、東京藝術大学附属音楽高等学校副校長をはじめ東京藝術大学、鳴門教育大学、兵庫教育大学連合大学院教授、聖徳大学大学院教授、全日本音楽教育研究会副会長、1992年には、文部大臣より教育功労表彰を受ける。全日本音楽教育研究会顧問、東京藝術大学音楽学部同声会副会長、日本合唱指揮者協会会長、NHK全国学校音楽コンクール審査員等を務めてきている。明治大学グリークラブOB合唱団駿河台倶楽部、板橋区混声合唱団、世田谷区合唱連盟主宰合唱団ラディアータ、恵那区民合唱団、共立女子大学合唱団等の指揮にあたってきた。1996年、小田原男声合唱団の音楽監督・常任指揮者に就任。



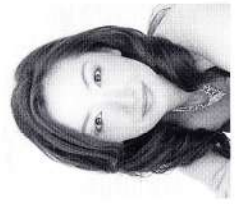
**辻 秀幸 常任指揮者**

幼少よりヴァイオリン・ピアノ・フルート・金管楽器・作曲を学び、東京藝術大学声楽科及び同大学院独唱科修了。1985年イタリアのミラノを中心にヨーロッパ音楽遊学。1986年イタリアのノバラ市国際声楽コンクール入賞。欧州教都市でペーターヴェン「第九」のソリストを務め、各地でコンサートに出演し好評を博す。国内でもドイツ・イタリア・日本歌曲を中心にリサイタル活動を展開、オペラでは古典から現代に至るまで、数多くの作品に出演し、その優れた演技力と歌唱は、新聞・音楽誌上で度々絶賛された。宗教音楽の演奏家としての活躍は特に目覚ましく、バツハ・ヘンデル・ハイドンの宗教曲・オラトリオの演奏ではソリスト・エヴァンジェリスト、また指揮者として、その活動は常に注目を集めている。現在指導に当たっているアマチュア合唱団は15団体を数える。洗足学園音楽大学客員教授、日本合唱指揮者協会副理事長、東京都合唱連盟理事、日本演奏連盟委員、全日本合唱連盟季刊誌「ハーモニー」編集委員、[ヒデさんは見た! ]連載中。アンサンブルBWV2001メンバー、Eテレ「Nコンマガジン」講師を務めるほか、各地の合唱講習会講師・合唱コンクール審査員、本年度NHK全国学校音楽コンクール審査員、本年度全日本合唱コンクール全国大会審査員を務める。辻秀幸・佐竹由美、辻志朗・辻悦子、辻裕久・なかにしあかね氏、の音楽一家。6人によるコンサート会場は毎回満席に。2014年、男声合唱組曲「土の歌」・2015年、男声合唱組曲「水のいのち」の客演指揮をとり好評を博す。2016年、小田原男声合唱団の常任指揮者に就任。



**村田 雅之 指揮者**

石川県出身。中学時代より吹奏楽部で指揮者、合唱部ではピアノを務める。石川県立金沢泉丘高等学校理科を経て、横浜国立大学工学部を卒業。大学在学中はグリークラブに籍を置き、1年次より学生ピアノリスト、3年次からは学生指揮者を務める。在学中より、多くの一般合唱団や講習会に参加、合唱全般の研修を積み、栗山文昭、松下耕、伊東恵司の各氏から影響を強く受ける。2016年1月、横浜国立大学グリークラブ定演では、男声合唱のための「ラプソディー・イン・チカマツ」[近松門左衛門狂想]の指揮をとり好評を博す。現在、音楽関連会社に勤務の傍ら、なにわコリアーズ、合唱団お江戸コリアーズ(本年度も全日本合唱コンクール全国大会に出場、同声合唱の部、金賞・最優秀団体・文部科学大臣賞・シード合唱団)に於いては、歌い手の他、指揮、ピアノ、打楽器を担当する。横浜国立大学グリークラブ、立正大学グリークラブなどの合唱団に於いて、指揮、ピアノ、アンサンブルレナードを務める。2014年、トレーナーとして小田男で指揮、ピアノを担当する。2015.2.21、KAMCA神奈川男声合唱協会・座間演奏会では、男声合唱組曲「永久二( ぶた二 )、作曲鈴木憲夫」の指揮をとり好評を博す。2016年、小田原男声合唱団の指揮者に就任。



**中根 希子 ピアノ**

平塚江南高校を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。第4回かながわ学生音楽コンクール入賞、県市長会会長賞受賞。第3回長江林国際音楽コンクール第2位。ウィーン、シカゴ等での音楽セミナー・マスタークラス参加、ディプロマ取得、修了演奏会に出演。1999年東京都庭園美術館コンサートでは、若手実力派演奏家として毎日新聞に掲載。同年、ポランド共和国大使館後援「日本ポランド国交樹立80周年記念および国際シヨバ記念演奏会」に出演。2007年以降毎年開催の「市民による小田原音楽フェスティバル」では、小林研一郎・末廣誠・広上淳一・富澤裕・山田和樹・黒岩英臣・佐藤眞の各氏指揮のもと、第九・モーツァルトレクイエム・オペラ合唱曲「ドイツクワイエム・メンデルズゾーン讃歌・土の歌の演奏会でピアノアシスタントを務める。他方、2009年ウィーンフィルメンバール・シユティテ弦楽四重奏団と共に、2012年小田原でのソロリサイタルを開催、生誕150周年を記念しドビュッシー、リストを演奏、大好評を博し聴衆を魅了。2013年豊嶋奏麗ヴァイオリンコンサートに於いてピアノを、2014年には小田原フィルハーモニー管弦楽団とペーターヴェン・ピアノ協奏曲4番を演奏。2015年、小田原でのソロリサイタルを開催、ドイツ大作を演奏し大好評を博す。国内外リサイタル活動はもとより、歌曲、合唱曲伴奏、室内楽等の演奏会やレコーディング、FMおだわらの出演CD製作等幅広く活躍。植田克己、佐藤俊、ノエル・フロレスの各氏に師事。



**杉山 範雄 ヴォイス・トレーナー**

小田原出身。10歳より小田原少年少女合唱隊に入隊、ルネッサンスから現代まで多くのアカペラ・アンサンブルを学ぶが、湘南工科大学附属高等学校、東京藝術大学音楽学部声楽科を経て、これまでに、「コン・ファン・トゥット・ドン・アルフォンソ」、「魔笛」ザラストロ、「カルメン」エスカミエリヨ、等を演じ、クーブラハン「聖スザンナのモテット」、バツハ「ヨハネ受難曲」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「戴冠ミサ」レクイエム、ペーターヴェン「第九」、フォーレ「レクイエム」、等、演奏会パスソロにて多数出演、小泉ひろし、小林研一郎、飯森範親等、各指揮のもとソリストを務める。また、合唱指導にも意欲的に取り組み、近年では合唱祭の講師等を務める。東京、神奈川を中心に、コーロ・しるふれい、金沢混声合唱団、In Pace、栄女声合唱団、ぶどうの会、鎌倉市民混声合唱団、北鎌倉女声合唱団、アンサンブル萌、コーロ・フォレスト、等の常任指揮者を務める。そして、サウンドブリッジ合唱団、JVC合唱団、中央区ブリエールジュニア・コーラス、品川区立第三日野小学校PTAコーラスの指揮者を務めている。さらに、桐朋学園大学附属「子供のための音楽教室」、明治大学グリークラブ、小田原男声合唱団、横浜混声合唱団等、の歌唱指導に取り組んでいる。杉友会やさしい合唱講座講師。神奈川県合唱連盟理事。声楽を多田羅迪夫、桑原妙子の各氏に師事。2010年、小田原男声合唱団の指揮者・ヴォイス・トレーナーに就任。

平成28年度〔2016年～2017年〕主な事業等

(1)	2016.	1. 12	(火)	歌いはじめ	旭丘音楽室
(2)		2. 6	(土)	平成27年度 総会	旭丘音楽室
(3)		3. 13	(日)	みなで歌おう！ 市による	小田原市民会館 大H
(4)		4. 23	(土)	第12回 KAMCA 神奈川男声合唱協会 演奏会	鎌倉芸術館 大H
(5)		6. 5	(日)	第65回 湘南合唱祭	茅ヶ崎市文化会館
(6)		9. 10	(土)	強化練習 (合宿) 泊	いこいの村あしがら
(7)		9. 11	(日)	強化練習 (合宿)	いこいの村あしがら
(8)		10. 10	(月)	第50回 小田原市民合唱祭	小田原市民会館 大H
(9)		11. 29	(火)	定期演奏会 リ/ハ1	旭丘音楽室
(10)		12. 2	(金)	定期演奏会 リ/ハ2	小田原市民会館 大H
(11)		12. 3	(土)	第45回 定期演奏会	小田原市民会館 大H
(12)		12. 27	(火)	歌いおさめ	旭丘音楽室
(13)	2017.	1. 10	(火)	歌いはじめ	旭丘音楽室
(14)		2. 4	(土)	平成28年度 総会	旭丘音楽室
(1)		3. 5	(日)	みなで歌おう！ 市による	小田原市民会館 大H
(2)		6. 11	(日)	第66回 湘南合唱祭	小田原市民会館
(3)		7. 15	(土)	第23回 JAMCA 韃 時勢合唱協	八戸演奏会 リ/ハ
(4)		7. 16	(日)	第23回 JAMCA 韃 時勢合唱協	八戸演奏会 ゲネ 演奏会
(5)		9. 17	(日)	第14回 KAMCA 神奈川男声合唱協会	70ツツ演奏会
(6)		10. 8	(日)	第51回 小田原市民合唱祭	小田原市民会館 大H
(7)		10. 21	(土)	強化練習	小田原市民会館 大H

第46回 定期演奏会 - 第64回 小田原市民文化祭参加 -

12月2日(土) 開場13:15 開演14:00 小田原市民会館 大ホール

予定曲目 ケルビーニ作曲「レクイエム・ニ短調」より

1. Introitus und Kyrie
3. Dies irae
5. Sanctus
7. Agnus Dei

他、邦人曲等は、選定中 です。

随時 募集 !! いっしょに歌いましょう !!

年齢 高校生～80歳代と、幅広い年齢層です。

どんな 男性で、歌好きであれば、どなたでも歓迎です。復団された方もたくさんおられます。

すまい 勿論、初めての方でも大丈夫です。お気軽にお越しください。練習用・パート別音取りCD等を用意します。

練習日 隔年の日本男声合唱協会、神奈川男声合唱協会の演奏会では、400余名による合同曲も演奏できます。

連絡先 小田原・湯河原・伊勢原・厚木・海老名・千葉・岡山県赤磐と広範囲です。

練習日 毎週火曜日 18:30～20:50、月末の日曜日13:30～16:45

連絡先 鈴木壽久 TEL 0465(73)8328 河田一男 TEL 0557(47)3274  
小田原 旭丘高等学校 (小淵蔵より 織方編、徒歩7分)

ワンステージ メンバー 募集 《2017年12月2日(土) 予定の 第46回 定期演奏会で、一緒に歌いましょう !!》

年齢 高校生～80歳代と、年齢制限はありません。

どんな 男性で歌好きであれば、どなたでも歓迎です。ワンステージと一緒に歌いましょう♪

練習日 初めの方でも大丈夫です。練習用・パート別音取りCD等を用意します。

練習日 火曜日 19:30～20:45 小田原 旭丘高等学校 音楽室 (小淵蔵より 織方編、徒歩7分)。

6月より 月1～2回平均 1.5回程度を予定 (練習日等の詳細は 下記連絡先まで)

練習日程等 詳細は3月からご案内します。 問い合わせ先 田 杉本 090-4677-6315 青野 0463-87-2473

参加費用 検討中(月会費はなし)。楽譜代は実費です。 募集は3月より受け付けます。

ステージ衣装は黒のスーツ (シングルorダブル)です。ご安心を。 曲目 男声合唱組曲 (邦人作品を予定 1月に確定)

委囀曲 への歩み

2001年	第30回記念 定期演奏会 委囀曲	初演	再演(JAMCA 初編録)	大木 惇夫	作詩	多田 武彦	作曲
2006年	男声合唱組曲「西湘の風雅」	初演	初演	北原 白秋	作詩	多田 武彦	作曲
	第35回記念 定期演奏会 委囀曲	初演	初演	信長 貴富	編曲	久石 譲	作曲
	男声合唱組曲「沓寒小景(ごんかむしやうかい)」	初演	初演	中川 李枝子	作詞	木村 弓	作曲
	男声合唱のための 宮崎 駿 アニメ映画音楽集	初演	初演	覚 和歌子	作詞	久石 譲	作曲
	さんぽ	編曲	編曲	中川 李枝子	作詞	多田 武彦	作曲
	さんぽ～finale～	編曲	編曲	大木 惇夫	作詩	多田 武彦	作曲
2008年	第37回 定期演奏会 委囀曲	初演	初演	信長 貴富	編曲	信長 貴富	編曲
	男声合唱組曲「大木惇夫の詩から 四季点綴(しよきてんい)」	初演	初演	信長 貴富	編曲	三好 達治	作詩
	5つのオアハケーニャによる憧憬	編曲	編曲	信長 貴富	編曲	丸山 薫	作詩
2009年	第38回 定期演奏会 委囀曲	初演	初演	三好 達治	作詩	多田 武彦	作曲
	男声合唱とピアノのための「赤い鳥小鳥」-北原白秋謹識-	委囀曲	初演	三好 達治	作詩	多田 武彦	作曲
2011年	第40回記念 定期演奏会 委囀曲	初演	初演	三好 達治	作詩	多田 武彦	作曲
	男声合唱とピアノのための「わが詩友」	初演	初演	三好 達治	作詩	多田 武彦	作曲
	男声合唱組曲「達治の旅情」	初演	初演	三好 達治	作詩	多田 武彦	作曲

# Members 2016

## 小田原男声合唱団

**T1** 加藤 重喜 (秦野市) 幸夫 (秦野市) 上利 (小田原市) 宏司 (小田原市)  
 河田 一男 (伊東市) 正純 (藤沢市) 熱田 (南足柄市) 隆純 (南足柄市)  
 斎藤 恵司 (伊勢原市) 精孝 (二宮町) 網盛 (小田原市) 一郎 (小田原市)  
 佐野 恵 (岡県 萩市) 健二 (南足柄市) 伊東 (秦野市) 清邦 (秦野市)  
 堀内 哲夫 (小田原市) 昇次 (小田原市) 岩越 (小田原市) 万里 (小田原市)  
 水城 高嶺 (秦野市) 隆 (二宮町) 江川 (鎌倉市) 卓男 (鎌倉市)  
 横山 茂 (千葉市) 勉 (秦野市) 大塚 (小田原市) 常昭 (小田原市)  
 渡辺 功 (茅ヶ崎市) 允彦 (茅ヶ崎市) 岡部仁之助 (秦野市) 和信 (小田原市)

団友 \*

**B1** 上利 (小田原市) 宏司 (小田原市) 宏司 (小田原市) 隆純 (南足柄市)  
 熱田 (南足柄市) 一郎 (小田原市) 網盛 (小田原市) 伊東 (秦野市)  
 伊東 (秦野市) 清邦 (秦野市) 岩越 (小田原市) 万里 (小田原市)  
 岩越 (小田原市) 清邦 (秦野市) 江川 (鎌倉市) 卓男 (鎌倉市)  
 江川 (鎌倉市) 卓男 (鎌倉市) 大塚 (小田原市) 常昭 (小田原市)  
 大塚 (小田原市) 常昭 (小田原市) 岡部仁之助 (秦野市) 和信 (小田原市)  
 岡部仁之助 (秦野市) 和信 (小田原市) 加藤 (小田原市) 義彦 (小田原市)  
 加藤 (小田原市) 義彦 (小田原市) 菊池 (小田原市) 興毅 (小田原市)  
 菊池 (小田原市) 興毅 (小田原市) 下村 (小田原市) 茂樹 (小田原市)  
 下村 (小田原市) 茂樹 (小田原市) 高橋 (小田原市) 敬 (南足柄市)  
 高橋 (小田原市) 敬 (南足柄市) 中村 (南足柄市) 隆行 (秦野市)  
 中村 (南足柄市) 隆行 (秦野市) 西山 (秦野市)

**B2** 赤川 軍一 (伊勢原市) 義信 (秦野市) 磯田 幸男 (小田原市) 遠藤 要 (小田原市)  
 遠藤 要 (小田原市) 笠原 紘 (小田原市) 桑原 敏雄 (大井町) 古林源次郎 (二宮町)  
 古林源次郎 (二宮町) 坂口 宗夫 (小田原市) 佐々木秀昭 (秦野市) 鈴木 壽久 (南足柄市)  
 鈴木 壽久 (南足柄市) 田島 達也 (南足柄市) 千葉陽一郎 (海老名市) 廣瀬 友二 (秦野市)  
 廣瀬 友二 (秦野市) 柳田 圭一 (湯河原町)

### ワンステージメンバー

**T1** 石田 宏治 (秦野市) 井筒 (海老名市) 青野 (小田原市) 正純 (小田原市)  
 高桑 邦安 (横須賀市) 白石 (開成町) 小西 (茅ヶ崎市) 正文 (茅ヶ崎市)  
 高山 光正 (大磯町) 坂口 (南足柄市) 田山 (伊東市) 正弘 (伊東市)  
 露木 聰 (小田原市) 山本 (茅ヶ崎市) 菊池 (小田原市) 義彦 (小田原市)  
 西山廣木代 (二宮町) 松浦 一弘 (湯河原町) 中村 (南足柄市) 茂樹 (小田原市)  
 松田 直隆 (山北町) 柳田 圭一 (湯河原町)

**T2** 井筒 (海老名市) 稔 (海老名市) 青野 (小田原市) 正純 (小田原市)  
 白石 (開成町) 久司 (開成町) 小西 (茅ヶ崎市) 正文 (茅ヶ崎市)  
 坂口 (南足柄市) 新治 (南足柄市) 田山 (伊東市) 正弘 (伊東市)  
 山本 (茅ヶ崎市) 康史 (茅ヶ崎市)

**B1** 青野 (小田原市) 正純 (小田原市) 正純 (小田原市) 正文 (茅ヶ崎市)  
 小西 (茅ヶ崎市) 正文 (茅ヶ崎市) 田山 (伊東市) 正弘 (伊東市)

**B2** 茶河 律 (厚木市) 井上 忠彦 (小田原市) 岩田 正美 (秦野市) 齊藤 健治 (川崎市)  
 齊藤 健治 (川崎市) 中間 了吾 (横浜市) 中村 公一 (愛川町) 村田 雅之 (横浜市)

### 名誉指揮者

外山 浩爾

### 常任指揮者

辻 秀幸

### 指揮者

村田 雅之

### ピアノ

中根 希子

### 運営スタッフ

團長 齋藤 恵司  
 副団長 鈴木 壽久  
 事務局長 杉本 健二  
 技術部長 磯田 幸男  
 財政部長 廣瀬 友二  
 事業部長 鈴木 壽久  
 団員部長 河田 一男  
 渉外部長 大塚 常昭  
 情報部長 上利 宏司

### ヴォイストレーナー

杉山 範雄

### 財政監査

水城 高嶺  
 柳田 圭一

### 演奏会スタッフ

委員長 杉本 健二  
 会計 廣瀬 友二

### 演出

笠原 紘  
 磯田 幸男  
 福井 隆  
 各技術部

### 舞台

桃井 真也 様

### 外渉

大塚 常昭

### 録画

坂口 宗夫

### 録音

KOSSAK 様

### 写真

上利 宏司

### 打上げ

河田 一男

### チリジロ

各団員部  
 杉本 健二

### アウンス

青野 幸夫 様

### 譜捲り

石崎 雅美 様

### 受付案内

柏木 晶子 様  
 南エコーコープス 様  
 市レレブジョンスト様

箱根の山は 天下の険(けん)も 物なかず  
 函谷関(かん)の山 千仞(せん)の谷  
 万丈(ばんじょう)の山 後(しりえ)に支(さ)え  
 前に聳(そび)え 霧(きり)は谷をとざす  
 雲は山をめぐり 杉(しの)の並木  
 昼猶(あ)聞(き)き 杉(しの)の並木  
 羊腸(やうぢやう)の小徑(せうけい)は 苔滑(たか)か  
 一夫関(いつぶかん)に当(あた)るや 万夫(ばんぶ)も開(ひら)け  
 天下(てんか)に旅(たび)する 剛毅(ごうぎ)の武士(ぶし)  
 大刀(た)腰(こし)に 足駄(あだ)がけ  
 八里(はちり)の岩根(いわね) 踏(ふ)み鳴(な)らす  
 斯(か)くこそありしか 往時(おうじ)の武士(ぶし)

後(しりえ)に～ 前(まへ)には山(やま)がそびえ 後(しりえ)は谷(や)により塞(ふさ)がれている  
 羊腸(やうぢやう)の～ 羊(ひつじ)の腸(ぢやう)のように 長くくねくねと曲(まが)り続く道(みち)

### 寺山修司の詩による6つのうた 思い出すために (男声四部版) 意訳の試み (BI 伊東清邦)

#### 1 かなしみ

私が書く詩のなかには  
 いつも家がある

だが私は  
 ほんとは家なき子

私の書く詩のなかには  
 いつも女がいる

だが私は  
 ほんとはひとりぼっち

私の書く詩のなかには  
 小鳥が数羽

だが私は  
 ほんとは思い出がきらいなのだ

一篇の詩の  
 内と外(と)に しめ出されて

私は  
 だまって海を見ている

#### 2 てがみ

つきよのうみに  
 いちまいの  
 てがみをながして  
 やりました

つきのひかりに  
 てらされて  
 てがみはあおく  
 なるでしょう

ひとがさかなと  
 よぶものは  
 みんなだれかの  
 てがみです

### 3 世界でいちばん遠い土地へ

一本の樹(き)は  
 歴史(れき)ではなくて  
 思い出である

一羽(ひと)の鳥(とり)は  
 記憶(きおく)ではなくて  
 愛(あい)である

一人(ひとり)の誕生(たんじゆ)は  
 経験(けいけん)ではなくて  
 物語(ものがたり)である

私は  
 ① それらのあいだを旅(たび)するとき

箱根(はこね)の山(やま)は 天下(てんか)の阻(さ)り  
 蜀(しやく)の樵道(せうだう) 数(かず)ならず  
 万丈(ばんじょう)の山(やま) 千仞(せん)の谷(や)に  
 前に聳(そび)え 後(しりえ)に支(さ)え  
 雲(う)は山(やま)をめぐり 霧(きり)は谷(や)をとざす  
 昼猶(あ)聞(き)き 杉(しの)の並木  
 羊腸(やうぢやう)の小徑(せうけい)は 苔滑(たか)か  
 一夫関(いつぶかん)に当(あた)るや 万夫(ばんぶ)も開(ひら)け  
 山野(やまの)に狩(か)りする 剛毅(ごうぎ)の武士(ぶし)  
 獵銃(りやくじゆう)の肩(かた)に 草鞋(わらじ)がけ  
 八里(はちり)の岩根(いわね) 踏(ふ)み破(やぶ)る  
 斯(か)くこそありけれ 近時(きんじ)の武士(ぶし)

一夫関(いつぶかん)に～ 一兵卒(いつべいそう)が守(まも)って 万(ばん)の敵(てき)が攻(せ)めて来て(来て)も開(ひら)けられない  
 蜀(しやく)の～ 断崖絶壁(だんげつてつぺい)に作(つく)られた柵(さく)のような道(みち)は人(ひと)一人(ひとり)がや(や)つと(と)の険道(けんだう)

#### 1 かなしみ

私が書く詩の中には  
 いつも明るい家庭(かみん)が描(えが)かれている

そう書く私の少年時代(せうねんじだい)は  
 家族(かぞ)に置き去(おきざ)りにされた生活(せいかつ)を送(おく)っていたのだ

私が書く詩の中には  
 いつも心を寄(よ)せる女性(にょせい)(母(はは))が描(えが)かれている

そう書く私の少年時代(せうねんじだい)は  
 女性(にょせい)の匂(にお)いさえ感じ(かん)じない寂(さび)しさの中にいたのだ

私が書く詩の中には  
 遊び相手(あそびあて)となった小鳥(せうちょう)が数羽(かずわ)描(えが)かれている

そう書く私の少年時代(せうねんじだい)は  
 ただ孤独感(こどくかん)の一つ(ひとつ)の表出(ひょうしゅつ)に過ぎ(すぎ)なかつたのだ

一篇(いつぺん)の私の書く詩(うた)の中の  
 表現(ひょうげん)されたものと現実(げんじつ)の違い(ちがひ)に悩(なや)まされ

ただ私は何も言(い)わず静(しず)かに  
 海(うみ)を見(み)ている自分がそこ(そこ)に居(い)るのに気付(きづ)くのです

#### 2 てがみ

静かな月の光(ひかり)る海(うみ)に  
 宛名(あてな)の無い(な)一枚(まい)の  
 手紙(てがみ)をそつと流(なが)して  
 その行方(ゆくえ)を見守(まも)りました

月の光(ひかり)に  
 照(て)らし出(で)された海(うみ)の中で  
 その手紙(てがみ)は碧(あお)く  
 光(ひかり)るのを見(み)ました

人が海(うみ)に泳(およ)ぐものを魚(いさな)と  
 呼(よ)んで居(い)るものは  
 誰(たれ)かが海(うみ)に流(なが)した  
 宛名(あてな)の無い(な)手紙(てがみ)の幻(まぼろし)かとも知(し)れませ

### 3 世界でいちばん遠い土地へ

そこに立つ(た)つ一本(いっぴん)の大樹(だいじゆ)は  
 記録(きこく)に記(き)されたた(た)たもの(もの)でなく  
 心(こころ)に映(うつ)し出(で)された映像(えいさう)である

そこに飛(と)ぶ一羽(ひと)の鳥(とり)は  
 狭(せま)い知識(ちき)として(として)ではなく  
 心(こころ)を温(ぬ)める広(ひろ)がりである

そこに生(な)まれた一人(ひとり)の人間(にんげん)は  
 た(た)だ年(とし)齢(れい)を積(た)み重(かさ)ねた(た)たものではなく  
 連(つ)なる(つ)なりのある命(いのち)の存在(そんざい)である

私は  
 大樹(だいじゆ)や鳥(とり)や人間(にんげん)との出(で)会い(あ)いを重(かさ)ねる時(とき)

なぜだか  
なみだぐんでしまうのです

#### 4 ぼくが死んでも

ぼくが死んでも 歌などうたわず  
いつものようにドアを半分あけといてくれ  
そこから  
青い海が見えるように

いつものようにオレンジをいいて  
海の遠鳴(とね)り数(かぞ)えておくれ  
そこから  
青い海が見えるように

#### 5 思い出すために

セーヌ川(岸)の  
手まわしオルガンの老人を  
忘れてしまいたい

青麦畑(あおむぎばた)でかわいた  
はじめてのくちづけを  
忘れてしまいたい

パスポートに「はさんでおいた」  
四つ葉のクロバー 希望の旅を  
忘れてしまいたい

(アムステルダムのホテル)  
カーテンからさしこむ 朝の光を  
忘れてしまいたい

はじめての愛だったから  
おまえのことを  
忘れてしまいたい

みんな(まとめて)  
今(すく)すぐ  
思い出すために

#### 5 種子(たね)

きみは  
荒れはたてた土地にでも  
種子(たね)をまくことができるか?

きみは  
花の咲かない故郷の渚(なぎさ)にでも  
種子(たね)をまくことができるか?

きみは  
流れる水のなかにでも  
種子(たね)をまくことができるか?

たとえ  
世界の終わりが明日だとしても  
種子(たね)をまくことができるか?

恋人(こいびと)よ  
種子(たね)はわが愛

知らず知らず  
涙を流している自分に気付かされるのです

#### 4 ぼくが死んでも

ぼくが死んだとしても 僕の好きな歌などうたわず  
普段と同じようにドアを 半分開けといてくれ  
そこから  
青い海を僕の眼は追えるのだから

普段と同じように僕に好きなオレンジをむいて  
海の遠鳴(とね)りを静かに聴いて欲しい  
そこから  
青い海を僕の眼は追えるのだから

#### 5 思い出すために

セーヌ川(岸)で逢った  
手まわしオルガンの老人のことを  
忘れてしまいたい

青麦畑で密かに交わした  
初(はじめて)めのキスのことを  
忘れてしまいたい

パスポートにそつと挟んでいた  
四つ葉のクロバーが運んだ楽しい旅のことを  
忘れてしまいたい

アムステルダムのホテルの  
カーテンから差し込む柔らかな朝の光のことを  
忘れてしまいたい

心を許した初めての愛の行爲だったから  
優しいお前のことを  
忘れてしまいたい

昨日のことのように全てのことを  
今(すく)すぐ  
心に蘇らせるために

#### 5 種子(たね)

あなたは  
人の手を離れ果てた大地であつても  
種子(たね)をまく勇氣があるか

あなたは  
花さえ咲かない故郷の渚(なぎさ)であつても  
種子(たね)をまく勇氣があるか

あなたは  
耕作(こくわ)など不可能な流れる水の中であつても  
種子(たね)をまく勇氣があるか

そのよゆうなことはないだろうが  
地球の終末が明日だとわかつていても  
種子(たね)をまく勇氣があるか

心(こころ)から愛する人(ひと)よ  
種子(たね)は私の心の決意(けつぎ)である

### 男声合唱とピアノのための時代 ~ ニューミュージックと呼びた歌たち ~

#### 1 無縁坂 / グレープ // 作詞作曲 : さだまさし

母(はは)がまだ若い頃 僕の手をひいて  
この坂を登る度(たび) いつもため息をついた  
ため息をつけば(な) それで済む  
後(のち)ろっただけは見(み)えやだめと  
笑(わら)つてた白い手(て)は とてつやもわらかだった

運(うん)がいいとか 悪いとか  
人は時々(ときどき) 口にすけるけど  
そういうこと(こと)つて確か(たしか)にあると  
あなた(あなた)をみて(みて)て(て)そう(そう)思う(思う)

#### 3 サボテンの花 / チューリップ // 作詞作曲 : 財津和夫

ほんの小さな出来事に 愛は傷(や)ついで  
君(きみ)は部屋(へや)をどびだした 真冬(まふゆ)の空(そら)の下(した)に  
編(あ)みかけた手袋(てぶくろ)と 洗(あら)いかげの洗濯物(せんたくぶつ)  
シヤボンの泡(あ)がゆれていて  
君(きみ)の香(か)りがゆれていて

たえまなくふりそそぐこの雪(ゆき)のように  
君(きみ)を愛(あい)せばよかつた  
窓(まど)にふりそそぐこの雪(ゆき)のように  
二人(ふたり)の愛(あい)は流(なが)れた



夜霧のかなたへ 別れを告げ  
雄々(おと)しきすらを いでてゆく  
窓辺にまたたくともしびに  
つきせぬ乙女の 愛のかげ

戦いに結ぶ 誓いの友  
されど忘れぬ 心のまち  
思い出の姿 今も胸に  
いとしの乙女よ 祖国の灯(ひ)よ

やさしき乙女の 清き思い  
海山(うみやま)はるかに へだつとも  
ふたつの心に 赤くもゆる  
こがねの灯(あかり)とわに消えず

変わらぬ誓いを 胸にひめて  
祖国の灯のため 闘(たたか)わん  
若きまますらおの 赤くもゆる  
こがねの灯(あかり)とわに消えず

## 男声合唱組曲 富士山

### I 作品第壹 (一)

麓(ふもと)には桃や桜や杏(あんず)さき  
むらがる花(はな)に蝶(ちょう)は舞(ま)ひ  
億(おく)萬(まん)の霞(かすみ)は舞(ま)ひ  
七色の霞(かすみ)たなびく

夢みるわたくしの  
富士の祭典

ぐるりいちめん花はさき  
ぐるりいちめん蝶は舞(ま)ひ  
昔(むかし)の楽器(がく)のすべは鳴(な)り出すのだ  
種(たね)蒔(ま)きのように鳥(とり)はあつまり  
日本のすべの鳥(とり)はあつまり  
楽器(がく)といっしよに歌(うた)っている

夢みるわたくしの  
富士の祭典

七色の霞(かすみ)は雪(ゆき)に映(うつ)え  
七色の陽炎(ひかり)になつてゆ(よ)らゆ(よ)らする  
鹿(か)や猪(いの)や熊(くま)や馬(うま)  
人はあゝないか人もあゝある  
へうたんの酒(さけ)や女の舞(ま)ひ  
標野(ひょうの)の人も歌(うた)っている

あゝ  
夢みるわたくしの  
富士の祭典

遠(とほ)く大雪嶺(おおくせり)からは黄鳥(わづ)が  
使者(しや)になつて花(はな)を脚(あし)へて渡(わた)ってくる  
三(さん)つの海(うみ)を渡(わた)ってくる

### II 作品第肆 (四)

川面(かわ)に春(はる)の光(ひかり)はまぶしく澄(あ)れ  
そよ風(かぜ)が吹(ふ)けば光(ひかり)たちの鬼(おに)ごっこ  
薫(かほ)の葉(は)のささやき  
行(ゆ)行(ゆ)子(こ)は鳴(な)く  
行(ゆ)行(ゆ)子(こ)の舌(しほ)にも春(はる)の光(ひかり)

土堤(どい)の下(した)のうまごやしの原(はら)に  
自分(じぶん)の顔(かほ)は両掌(りやうてい)のなかに  
ふりそそぐ春(はる)の光(ひかり)に  
却(かへ)つて物憂(ものう)く眺(なが)めてみた

少女(しょうに)たちはうまごやしの花(はな)を摘(と)んで  
巧(たく)みな手(て)さばきで花環(はなわ)をつくる  
それをなはにして繩跳(なは)びをする  
花環(はなわ)が圓(ま)を描(えが)くとそのなかに

赤いサラフアン縫(ぬ)うてみても  
楽しい あの日(ひ)は帰(かへ)りやせぬ

たえ 若い娘(むすめ)じやとて  
何(なに)が その日(ひ)が 長(なが)からう

燃(も)えるようなそのほほも  
今(いま)にごらんいろあせる  
そとときき 思(おも)ひあたる

笑(わら)うたりしないで 母(はは)さんの  
言(こと)つとく言葉(ことば)を よくお聞き

とは言(こと)え サラフアン縫(ぬ)うていると  
お前(まへ)と一緒(いっしょ)に 若(わか)がえる

意訳の試み < BI 伊東清邦 >

### 作品第壹 (一)

山里(やま)にも桃(もも)や桜(さくら)や杏(あんず)が咲(さ)き  
その咲(さ)き乱(みだ)れる花(はな)々に蝶(ちょう)が舞(ま)い  
数(かず)限りない蝶(ちょう)が乱(みだ)舞(ま)し  
まるで七色の霞(かすみ)が薄(うす)い層(かさね)になつて漂(たゆ)っている

それが私の夢(ゆめ)の中(なか)にある  
厳(げん)かな富士(ふじ)の祭典(まつり)の風景(ふうけい)である

辺(へ)り一面(いつめん)に花(はな)は咲(さ)き  
辺(へ)り一面(いつめん)に蝶(ちょう)は舞(ま)い  
古(いにしへ)の楽器(がく)もことごとく鳴(な)り始(はじ)め  
種(たね)蒔(ま)きも日本(にっぽん)中の鳥(とり)たちが集(あ)まり  
それ(それ)も日本(にっぽん)中の鳥(とり)たちが集(あ)まり  
楽器(がく)の音色(おんしき)に合(あ)わせて集(あ)まらうに歌(うた)っている

それが私の夢(ゆめ)の中(なか)にある  
厳(げん)かな富士(ふじ)の祭典(まつり)の風景(ふうけい)である

七色(しちしき)の霞(かすみ)は雪(ゆき)に映(うつ)えわたり  
七色(しちしき)の陽炎(ひかり)となつて静(しず)かに揺(ゆ)らめいている  
鹿(か)や猪(いの)や熊(くま)や馬(うま)の動物(どうぶつ)たち  
人はどうかとも目を凝(こ)らすと その輪(りん)の中(なか)にいる  
瓢箪(ひょうたん)の酒(さけ)が振(ふ)れおれ女(おんな)たちも楽しく踊(おど)っている  
身(み)分の高い人(たかい)たちも同じ輪(りん)の中(なか)で歌(うた)っている

あゝ なんという喜び(よろこび)ではないか  
それが私の夢(ゆめ)の中(なか)にある  
厳(げん)かな富士(ふじ)の祭典(まつり)の風景(ふうけい)である

遙(はるか)か彼(かの)方の雪(ゆき)を頂(いただき)く嶺(ね)々(ね)からは美しく啼(な)く鳥(とり)が  
富士(ふじ)の祭典(まつり)を祝(いわ)うかのように花(はな)を脚(あし)へて渡(わた)ってくる  
広い海(うみ)原(はら)を越(こ)えてやってくる

### 作品第肆 (四)

静(しず)かな川(かわ)の水面(すいめん)に春(はる)の光(ひかり)が眩(くら)しく輝(かが)いでいる  
柔(な)らかかな風(かぜ)が波(なみ)紋(もん)を鬼(おに)ごっこでもするよりに輝(かが)せ  
葦(あし)の葉(は)は微(こ)かに鳴(な)り出し  
行(ゆ)行(ゆ)子(こ)は鳴(な)く  
その行(ゆ)行(ゆ)子(こ)の舌(しほ)にも春(はる)の光(ひかり)が微(こ)かに光(あ)っている

川筋(かわすぢ)の空(そら)き地(ぢ)にはうまごやしの花(はな)が咲(さ)き乱(みだ)れ  
私は両手(りやうてい)で顔(かほ)を覆(おほ)い  
降(ふ)り注(つ)ぐ春(はる)の光(ひかり)を感じ(か)るとき  
現(げん)実(じつ)を忘れ(わす)れ夢(ゆめ)の中(なか)にいると錯(さく)覚(かく)するのです

若い娘(むすめ)たちはうまごやしの花(はな)を摘(と)んで次々(つぎつぎ)と  
巧(たく)みな手(て)さばきで花環(はなわ)に変(か)えていき  
花環(はなわ)ができると繩跳(なは)びをして楽し(たの)しそうに遊ぶ  
円(ま)を描(えが)く花環(はなわ)の中(なか)に

富士がはひる  
その度(たび)に富士は近づきとほくに座る

耳には行行子(いしり)  
頬(ほ)にはひかり

遠くの富士が入ると  
その度ごとに富士が近づいたり遠くに座って見える  
私の耳は行行子(いしり)の啼き声に驚き  
若い娘たちの頬には春の光が溢れている

### III 作品第拾陸 (十六)

牛久(うしひ)のはての  
はるかのはての山脈(やまね)の  
その山脈(やまね)からいちだんだん高く  
黒(くろ)富士  
大(おほ)なる  
はるか  
黒(くろ)富士

### 作品第拾陸 (十六)

牛久(うしひ)から見える  
遙(はるか)か遠く(とほ)の山脈(やまね)の  
その山脈(やまね)から一段高く聳(そび)える  
黒(くろ)々々(くろくろくろ)富士は  
何(なに)と大(おほ)きな広(ひろ)がりの  
空間(くわんげん)を生(な)み出す  
黒(くろ)々々(くろくろくろ)とした夏の富士だらう

さくらんぼ色(さくらんぼいろ)はだんだん沈(しず)み  
上天(あまのて)に  
金隈(きんがま)取(と)り  
雲(くも)一点(いってん)

夕映(ゆふげい)えの中にさくらんぼ色(さくらんぼいろ)した太陽(たいやう)は静(しず)かに沈(しず)み  
上空(うそく)に  
金色(きんいろ)に隈(がま)取り(と)り  
一片(いっぺん)の雲(くも)が輝(かがや)いている

〈 存在(そんざい)を超(こ)え無限(むげん)なもの 〉  
〈 存在(そんざい)に還(かへ)る無限(むげん)なもの 〉

〈 私達(わたしたち)の意識(いしぎ)の外(ほか)になる遙(はるか)か永遠(とほ)なもの 〉  
〈 私達(わたしたち)の意識(いしぎ)の外(ほか)になる遙(はるか)か永遠(とほ)なもの 〉

折(を)りの如(ごと)き  
はるか  
黒(くろ)富士

それは折(を)りの対象(たいざう)なのだらう  
崇高(たうこう)な空間(くわんげん)を生(な)み出す  
黒(くろ)々々(くろくろくろ)とした夏の富士(ふじ)であることよ

### IV 作品第拾捌 (十八)

嗚呼(ああ)

ああ、見事(みごと)な

まるで紅(べに)色(いろ)(か)の狼火(ろうか)のよう(よう)に  
豊旗雲(とよはたぐも)は満(み)ちと燃(も)え

それは真(ま)つ赤(あか)な狼煙(ろうえん)の(の)ろしを挙(あ)げるよう(よう)に  
美(うつく)しく棚引(たなひき)く豊旗雲(とよはたぐも)が燃(も)え盛(も)り

その下(した)に  
ズーンと黙(も)す  
黄銅色(くわどういろ)の(の)大存在(おほいそんざい)

その下(した)に  
咄々(とつとつ)と無言(むげん)に立つ  
黄銅色(くわどういろ)に光(ひかり)り輝(かがや)く富士(ふじ)の姿(すがた)がある

まぶしいぬるい光(ひかり)に浮かぶ数数(かずかず)の  
豊旗雲(とよはたぐも)の

眩(くら)しく柔(な)らかな光(ひかり)に映(うつ)し出(で)されるたくさんの  
美(うつく)しく棚引(たなひき)く豊旗雲(とよはたぐも)が浮(う)かび

その下(した)の

その下(した)の

地軸(ちじく)につづく  
黄銅色(くわどういろ)

地軸(ちじく)にまで深く根(ね)を下(くだ)ろし  
光(ひかり)り輝(かがや)く黄銅色(くわどういろ)は

どこからか そして湧(わ)きあがる  
天(あま)の楽音(がくおん)

どこからともなく 自然(しぜん)に湧(わ)き上がる  
蔽(おほ)かな宇宙(うちゅう)に広がる響(こゝろ)きではある

### V 作品第貳拾壹 (二一)

平野(ひらの)すれすれ  
雨雲(あまぐも)屏風(びやうぶ)のおもたくとざし  
その絶端(ぜつたん)に  
いきなりガツと  
夕映(ゆふげい)えの  
富士(ふじ)

地平線(ちへいせん)すれすれに  
雨雲(あまぐも)は屏風(びやうぶ)のよう(よう)に重(おも)く伸(の)び伸(の)び  
その一番(いちばん)速(すみ)い所(ところ)に  
行きなり眼(め)を開(ひら)かんばかりに  
夕映(ゆふげい)えに映(うつ)し出(で)される  
崇高(たうこう)な富士(ふじ)の姿(すがた)を現(あらわ)す

降りそそぐそそぐ  
翠藍(すいらん)のガラスの  
大驟雨(おほしづめ)の

その富士(ふじ)を包(か)み込むよう(よう)に雨(あめ)が降りしきる  
薄青色(うすあおいろ)のガラス線(せん)のよう(よう)に  
見事(みごと)な夕立(ゆふだち)であることよ

酒匂(さかづき)の岸(ぎし)

※ ほほえみとほほえみで  
たのしみにしよう また逢(あ)える日を  
あなた(あなた)のきれいなほほえみは  
わたし(わたし)のところに花(はな)と咲(さ)くでしょう

松林(しょうりん)は煙(けむり)のごとくかすみゆき  
また青(あお)みゆく遠(とほ)き山脈(やまね)の  
瀬(せ)の音(ね)もいよよつのるに  
おのづから  
口笛(くちふえ)を吹(ふ)き  
石(いし)なげ  
ひとつりありあそびぬ、  
波(なみ)がしら白(しろ)きあたりに。

〔西湘(せいしやう)の風雅(ふうが)〕より  
〔酒匂(さかづき)川(がわ)〕

さよならをいうまえに  
約束(やくそく)しましよ やさしいほほえみは  
わたしのところに消(き)えないでしょう  
木枯らしの吹(ふ)く夜(よ)は  
思い出すでしょう  
あなたのあかろに灯(あかり)をともすでしょう  
きらめく星(ほし)に  
あなたのほほえみは  
わたしのところに消(き)えないでしょう  
※

ほほえみを ありがとう

〔ほほえみ〕より  
〔ほほえみ〕